

We are AneChan! //



# 農業女子 AneChan

巻頭特集

あねちゃん) 抜けるような青空と緑豊かな田畑風景の中に咲く、女性たちの笑顔。「農業女子AneChan(あねちゃん)」は、高島町の農業に携わる女性の立場で、農業と取り巻く環境を見つめていこうと立ち上げたグループです。子育て真っ最中の忙しい日々の中で、農業に関わりながら充実した生活を送る女性たちに、活動の様子などをうかがいました。

## 農業×生き物



果樹



米&酪農



高校3年の時に実家の酪農を継ごうと決意。仔牛から成牛まで多くの乳牛を育て、1日あたり850kg程の牛乳を生産している。東京ドーム7個分の草地で牧草作りも。「牛舎に顔を出すと、ごはんちょうだい!と牛たちが立ち上がって待っているんです。それがなんとなくかわいらしくて(笑)」



酪農



### 共感し合えるコミュニティ

メンバー同士の出会いは2015年11月。高島町が主催する、農業従事者の女性団体や個人を応援する事業説明会に参加したことがきっかけでした。参加していたのは大野美千代さん、久保田菜ツ美さん、菊地夏未さん。日頃から「農業をする女性たちの交流の場がほしい」「農業をするうえで情報が届きにくい」というモヤモヤした思いを抱いていた3人は、すぐに意気投合。その後「農業女子AneChan(以下AneChan)」を発足させました。当初は6人だったメンバーもいつしか10人に。そして最近またひとり加わり、今では11人。実家が農家の人、農家に嫁いだ人、新規就農した人など就農の「始まり」はそれぞれ。米農家、酪農家、野菜農家、果樹農家：と育てるものが異なるのも、この会の特徴です。

それを超える「家族と一緒にやれるという楽しさと喜び」を伝えていきたいと瞳を輝かせて話す言葉には力がこもっていました。同じく「一家で酪農に従事している中川有加さんも」生きていく上で食は欠かせないもの。乳牛を立派に育てて、安心でおいしい牛乳を消費者に届けていきたいです。みんなを「おいしいね」の笑顔にしたいな」と、仕事にやりがいを感じています。

にっこり。分野や環境は違っても農業への思いは共通。技術を教え合うことよりも、共感し合える仲間の存在がAneChanにとって大切だと大野さんの話から伝わってきます。

### しなやかに、たくましく!

自然を相手にする仕事環境や後継者不足など、農業を取り巻く課題はたくさん。しかし、それらもポジティブに捉えているメンバーたち。埼玉県から夫の実家がある高島町に嫁いだ佐藤純子さんに、家族の闘病、そして自身の大病をきっかけに、家業である農業を継ぐことを決意。「この会に入って、農業には未来がある!と思った」と、とても前向き。「家族と一緒に時間を過ごしながら、うれしいことも大変なことも全員で共有し、協力し合えるのが農業の魅力です。農業ってきつい・汚いというネガティブなイメージを持たれることが多いんです。でも、

ちゃんが先生。教科書は『現代農業』!」と笑うのが菊地さん。農業がしたくて大学卒業後に高島町へ戻り、結婚した今も米沢市から毎日実家に通いながら、ばあちゃん」と二人で野菜や果樹を栽培しています。「両親が勤め人だったので誰かがやらないと、という危機感がありました」。小さい時から祖父母の手伝いをして農業を身近に感じていたことが、継ぐ決断につながったようだと語ります。

果樹農家を営む父親の背中に憧れを持っていったという佐藤綾香さん。「農業をするなら自立してやること。親と一緒にだと甘えが出るから。」と言う父との約束で、耕作放棄地を借りて、一人で果樹栽培を始めました。独立して7年、昨年から夫も経営に加わり、農業と子育てとを二人三脚でがんばっています」と語る佐藤さん。現在ではパートさんを雇うまでになりました。「農業に未来はある?とかよく言われますが、農業の未来はここにあるよね!!」と話す佐藤(純)さんの言葉に全員がにっこりうなずいていました。

代表 大野美千代さん



果樹

夫の両親の後を継ぎ、「高尾」シャインマスカットをメインに、ワイン用を含め20種類ものぶどうを栽培している大野さん。「自然を感じながら作業をしていると、生きている感じがします」

菊地夏未さん



野菜&果樹&農産加工



久保田菜ツ美さん



米&大豆&野菜

## 農業×実り



これ、ぜんぶ玉ねぎ! 抜いてキレイに整列



4歳の子どもの手のひらほど大きな栗



1. 2016年10月「第1回 たかはたSAI」は好評で、次の年も!という声が多かったとか。その声に応じて、と思っていたところメンバー9人中4人が妊娠・出産のおめでたラッシュで見送りに。次の開催が楽しみです 2. 2017年9月 JR仙台駅で開催「たかはたフェア」。果物や野菜が飛ぶように売れてニコニコ 3. 2018年2月 高島町よねおりかんこうセンターで開催「チサンマーケット」 4. 2018年8月「山形県観光物産市」。玉ねぎなど野菜のほか、旬のぶどうが人気だったそう



映画『いただきます』上映時に、食育活動のひとつとして食に関する絵本を展示

# 農業×子ども



「かあちゃんは、きかいた〜くさんもっててカッコいいんだよ! ポクもりたいんだ」と農作業する母の姿に憧れている息子さんの顔を、菊地さんがやさしく撫でていました



## 女性目線で農業を

農業を考えるうえで外せないのが「子育て」という視点。県外で暮らした経験を持つ久保田さんは、自身が生まれ育った自然豊かな場所で子育てをしたいと家族とともにリターン。実家の農業を家族全員で切り盛りしながら、農業の素晴らしさに魅せられていくひとりです。「土に触れたり、日々変化する作物を見守ることで癒されています。家族の働いている姿を、子どもたちに見せてあげられることも農業の魅力です」と話す傍らで、子どもたちは畑で虫探しに夢中。久保田さんの子育ての理想形がこの町にはあるのかもしれない。

隣県から嫁いだ皆川紋衣さんは、『食の安全』をキーワードに農業と向き合っています。実家は非農家だったものの、自分で野菜を作ってみたくて思っていたそう。農業に興味を持ったきっかけは、小さい頃からアレルギーの症状があり、母親が無農産物の野菜を農家から買って食べさせてくれたという自身の体験から。「我が家は有機農業に取り組んでいるので、雑草や虫が多くて。でも、本来はそういうもんなんだと感じます」。

フトのワークショップを含めた複合的なイベント「たかはたSAI」を開催。その後も物産市やイベントに参加し、農産物の販売をしてきました。「今はコロナ禍でやるのが制限されていますが、今後は他地域のマルシェやイベントに参加する機会が増えてくると思います。その中で大切にしたいのは、負担のない活動。子育て中のメンバーが多いので、それぞれやれる範囲で参加できるのがAneChanの良さです」と大野さん。常に自然体で頑張りすぎず、楽しく無理なく続けていくのがこのグループのスタンス。対外的な催しの運営や参加よりも、話をしたいときに集まれるコミュニティを大切にしています。「プライドを持って農業を頑張っているみんなの様子を見ると、カッコいい」と思います。「メンバーと一緒に販売の活動ができて楽しい」「ひとりじゃない。みんながいるから頑張ろう! 楽しもう! と思えるようになりたい」と「ここでの出会いに刺激を受け、自分ももっと頑張ろうという気持ちになりました」——次々と出てくる加入してみたいの感想。そこから感じるのはAneChanが一人一人の心の拠り所に

米&野菜



皆川紋衣さん

齋藤愛子さん



果樹

1年半前に、山形市から高島町に家族とともに移住し、就農。「ふりかえれば思いきった決断でした」と話す齋藤さん。姉の大野さんのぶどう栽培と一緒に手掛けています。「技術を覚えていく過程が楽しい」と意欲的。「粒を抜くと大きくなる...とか、ぶどうのレスポンスが楽しい」と満面の笑み

有機農法で米や野菜を育てながら、常にその根底にあるのは、安全なものの子どもたちに食べさせたいという母としての思い。「草取りや防虫対策にどれだけ手をかけたかで、作物の出来が変わってくるんですよ」と隣にいる娘さんと目を合わせ、やさしくほほえむ皆川さんが、メンバー全員に共通する思いを代弁してくれました。小さい種から大きく育っていく作物や生き物の生命力——それを目の当たりにできるのは農業の特権。根気のいる作業の繰り返しですが、「頑張っただけ結果が出る」、それが農業の楽しさであり、やりがい」と全員が口をそろえます。

## 無理せず、自分たちのペースで

AneChanは自分たちの交流だけでなく、農業を知ってもらうための情報発信も目的の一つ。農産物に興味を持ってもらおうと、発足から半年後に音楽やクラ



「あま〜くておいんだよ。ママのすもも、おいち〜!」



なっているということ。

今後はメンバーの園地や牧場の見学のほか、他地域の農業女子たちともつながりたいという考えも。個人の活動として中学生向けに出前授業を行い、農業を伝えている大野さん。地元の小・中・高校の生徒を招き、搾乳体験を行っている中川さん。中学生向けの農業ガイドブックで、農業の魅力発信をしている久保田さん。食育をテーマにした活動も、少しずつ広がっていきたいという思いもあります。

農業は命をつなぐ仕事。「自然から食物を得る喜びと、夢のある職業であること」とも子どもたちに伝えていきたいと話すAneChanたちの笑顔がまぶしく、頼もしく見えました。

お忙しい中、取材に協力いただき、ありがとうございました。

# 農業×癒しの風景



## information

# 農業女子 AneChan



フェイスブックをチェック

facebook.com/Anechan.yamagata

## どうして『AneChan』?

なかなか決まらなかった名前。誰かがポソッと呟いた「あねさ」がきっかけ。かわいらしさと響きの良さをプラスして、「あねちゃん」に!



# Ane Chan

at Takahata Town

高島町出身のイラストレーターの方に作っていただいたロゴ。「いろいろな農業をそれぞれが営んでいるので、それをイメージできるおしゃれなデザインに!」と依頼したそう。「いいよねー。麦わら帽子だけ、地平線と山にも見えるし、高島っほい!」とメンバー全員のお気に入り